

# 日本の伝統医学を以て肺炎コロナウイルスを説明する

(英語訳)

連絡先 : [klapper@alum.mit.edu](mailto:klapper@alum.mit.edu)

驚異的な影響力を持つソーシャルネットワークが溢れ、すべてにおいてデジタル化が賛美され、グローバル化している現代、前例のないウイルスが地球を丸ごと麻痺させました。猛威を振るう伝染病に直面した世界の国々がとった対処法、それは遠い過去に先祖たちが実践したのと変わらないものでした。国境閉鎖、感染者の隔離、保護具の着用（マスク、手袋、バイザーなど）・・・。新型肺炎コロナウイルスが、まるで中世で世界を揺るがしたペストやハンセン病の現代版であるかのようなようです。

現在、これまでめったに問われて来なかったある問題を直視すべき時期が来たと考えられます。最先端の技術こそが、このウイルスの爆発の原因の一つだとしたらどうでしょうか。中国の武漢のコウモリが犯人とされていますが、相乗効果を生み出す他の現象が原因だとしたらどうでしょう。例えば、人間の神経系の慢性疲労や、増加し続ける電磁波の密度、そして日常生活のすべてにおいて使われるハイテクな機器の蔓延など。

それが、ソール・ヴァレーが立てた仮説です。これまで30年間、彼は日本の伝統医学を実践し続け、脈を読み取ることで数百人の患者を効果的に治療してきました。過去百年で最も深刻な危機を招いたこの感染症について、前例のない分析と仮説をここで提示いたします。

現代において、人間だろうと地球だろうとその健康状態を語る際に最も利用されるのは分子科学用の専門用語です。しかし、健康や治療に関する多くの知識は全く別の視点に立つ、別の言語でしか表現できないものです。それは「感じとる」という視点で語られる言語です。もちろん感じとられた情報と、科学的に分析された情報は相入れないものではありません。ソール・ヴァレーはこの「感じとる」医学の専門家です。これまで太古の昔から継がれてきた、最も古い医学療法の系統に派生した彼の知識と経験は、信憑性があります。皆様どうかこのメッセージに耳を傾けてください。

# コウモリと染色体と電磁波

Saul Vallée 著 (ソール・ヴァレー / 日本の伝統鍼師)

## 電磁波によって捻じられる細胞の働き

自然界の電磁波や放射線は、私たちの環境において重要な要素であると言えます。それは宇宙の原始から存在してきたもので、生命には不可欠であり、そもそも生命の誕生にも、その後、遺伝子の進化にも大きな役割を果たしてきました。コウモリは、日中は太陽の強い放射線から身を守る必要もありますし、夜間は音波を使ったエコロケーションのおかげで位置の把握や狩りができるといふ、生物の中でも特に放射線に敏感な生き物です。

コウモリも他の生物たちと同じように、その環境に変化が生じる度に生き延びるための大きなチャレンジを強いられています。そうは言っても、例えば自然放射線がゆっくりと長時間にわたって変化した場合、それは大きな障害を引き起こすことなく、細胞の中に徐々に常設的に組み込まれ、急変を伴いません。逆に現代の技術が生み出す電磁波などの放射線を例に、技術が急速に発生・進化する場合はあまりにも変化が早いため、細胞のメカニズムがついていくことができず、対応がむづかしくなったり、時には不可能であったりしてしまいます。

武漢で昨年冬の冬に実施された新たな電波帯域を使った「5G」（第5世代移動通信システム）の、急激で大規模な設置もその例の一つです。このような状況が、電磁波が新型コロナウイルスの発生にどのように影響を与えたかを理解する上で、どのように役立つかを以下に述べたいと思います。私は、この放射線がコウモリの体内で新型コロナウイルス自体の生成を誘発した可能性が高いこと、そしてこのウイルスはその後、種を越えて人間に伝わりパンデミックを引き起こしたのではないかと、という仮説を提案したいと思います。

コウモリというのは自分が置かれている環境を察知するため、エコロケーションを使って反響して自分に戻ってくる音波を分析しなければいけません。例えば、ある理由で移動して新しい住処に拠点を置こうとしているコウモリは、その新たな環境で、エコロケーションで戻ってくる波長帯や様々な音波の干渉などを分析し、解釈方法を調整しないと状況を正しく理解する能力を維持することができません。私はこれまで臨床の傍ら数多くの動物のケアを積み重ね、その行動を観察してきた長年の経験から、この適応する能力はある共鳴プロセスを経て生じているものだと信じるようになりました。コウモリはその脳の中でおそらく、新しい放射線や電磁波・音波を「自然な」環境の一部として「受け入れる」ことを身に付けようとしていくのです。新たな波長と共鳴できるようになり、それらを記憶するのです。その後、それらを無視する選択もできます。つまり、自分の視点で見て、生存に関わる波長と二次的なものと線引きするのです。

コウモリが置かれている環境の電磁波の変化というのは、染色体やタンパク質生成の調節にミクロのレベルで影響を与えているはずですが、染色体はその電気伝導性と内部対称性の特性により、その電波を受信および伝搬するための「アンテナ」として機能していると考えられています(1)。コウモリが放射線や電磁波に対して感受性が非常に高いことを考えるとおそらくコウモリは染色体そのもの、もしくは染色体内で電磁波に反応する原因であるといわれている遺伝子は、特に変化の影響を受けやすいものなのでしょう。タンパク質生成にかかわる染色体の調節に関しては、細胞内でそのプロセスに関与する多くの生化学的なメカニズムも電磁波の変化の影響を受けている可能性があります。

(1) 遺伝子や他の細胞内分子と電波と総合作用について多くの研究がなされています。この記事は遺伝子が「アンテナ」として機能していることについて語っています。: DNA Is a Fractal Antenna in Electromagnetic Fields, Blank M, Goodman R. Int J Radiat Biol. 2011 Apr;87(4):409-16

## ウイルスの誕生につながる細胞変異と脈診

伝統的な脈診では、コロナウイルスの感染者の中で急性症状を示さないが治療を必要とする患者の場合、その脈を描く時に使われる形容詞は「早い」「熱い」「浅い」「浮いている」「まるで、ピンと張りつめた糸に特に強力な電流が走るような感じ」などです。脈拍、および他にいくつかの関連症状をさらに観察することで、患者の体調は肺の内側の上皮膜において一定して継続する過度の興奮状態にあると見受けられます。これらの観察は、現代医学の科学的な視点で確認される肺細胞膜に沿った急性炎症と完全に一致しています。脈診の読み取りや様々な患者の色々な症状の観察から私が立てた仮説では、この過度な興奮状態は免疫系の不安定化に付随する二つの現象の発現である可能性があるということ

す。その一つは肺細胞のウイルス感染という現象、もう一つは神経伝達物質アセチルコリンの作用の一方的な阻害という現象です。肺胞と迷走神経の間のシナプスで神経の副交感神経性抗炎症機能が妨げられているのです。この仮説が正しければ、この抑制作用の原因となる分子はアセチルコリンエステラーゼか、それと非常によく似ている性質持っている分子であると考えられます。

どちらにしろ、今回のようなウイルスや迷走神経の作用を抑制する物質の増産の起源は、武漢のコウモリの迷走神経の細胞変異に原因があるのかもしれませんが。その細胞変異は、急激な5Gネットワークが展開されたことが起因していると考えられるのです。私は生物学の及び微生物学のスケールでこの仮説を裏付け、以下の通りの推論を提案します。上記で説明したようにコウモリが周りの環境を把握する際、様々な波長を分析解釈するのですが、その時にそれらを二つの種類に分けています。一方は自然に存在し、コウモリがあえてそれに対して特別に対応する必要のないもの、もう一方は平常のものに比べて大きな変化を示すもので、それに対しては適切な対応をしないと生存が危ぶまれるものです。この解釈プロセスはおそらくコウモリの延髄の迷走神経細胞内で起き、生化学的な影響を発生させています。まず、コウモリが環境を分析解釈した結果何も特別な行動を要さない場合、迷走神経は正常に機能します。遺伝子は適切なアセチルコリンを生成するコーディングをします。ところがもし、コウモリが環境の変化が異常に大きいと判断した場合、アセチルコリンをコーディングする遺伝子よりもアセチルコリンの生成を抑制する遺伝子のほうが支配するようになります。このように迷走神経の細胞内のバランスというのはコウモリが外で感知する電磁波や放射線に影響されるものであり、それらが迷走神経の副交感神経弛緩および抗炎症のそれぞれの特性を、どの程度活性化させるかを決定させるのです。

コウモリはアセチルコリンの生成が止まると神経において副交感神経作用が妨げられ、結果として「ストレス」の状態に陥ります。その緊張を解消するためにとる行動が食べることで、食することで発生する迷走神経内の生化学的な変化が、アセチルコリンを復活させるのです。ところが武漢で起きた電磁波の導入が起した環境の変化というのはおそらくコウモリが処理しきれないほどのものだったと思われまます。この種の波長は適応するのがむつかしく、コウモリが共鳴できるようになるのに時間がかかるものです。すなわちそれができるまでの間、コウモリはアセチルコリンの生成を抑制する分子を過剰生産しているということです。それは結果として上記の2点目に申し上げた免疫能力を阻害する出来事、すなわち副交感神経系の抗炎症力を低下させ、加えて、アセチルコリンの生成を抑制する分子の絶え間ない需要は最終的にそれを担う遺伝子の生産能力をも超えてしまうこともあり得るのです。

私の仮説の第二の部分として、このような状況が遺伝子の発現におけるRNAの機能に関わる劇的な出来事につながるのではないか、という事を考えてみたいと思います。細胞が抑制分子の必要性を満たすことができなくなると、RNAの役割は決定的に変化します。単にシナプスを越えて肺胞膜上のアセチルコリン活性部位に送られて、アセチルコリンの作用を阻害するための分子を産生するmRNAとして機能するのではなく、RNAはゲノムの機能によって肺胞細胞のこの同じ部位に侵入して、そこで複製するのです。これにより、この上皮組織の非常に有利な生殖環境を利用して、その数を急速に増加させることができるようになります。これを行うためにRNAはコウモリの免疫システムの協調によってタンパク質のコートに包まれ、肺胞細胞膜のその部位に結合するために転送されます。

問題のRNAが新しい電磁界に反応して産生されたものなのか、それとも歴史的にコウモリに存在し、同様の急激な環境変化によって産生されたウイルスRNAなのか、ここではSARS-CoV-2ウイルスの起源の可能性とも言える、ある説明を見つけることができます。それは上記の2つの免疫不安定化イベントの最初のものであります。

## コウモリの体内でのウイルス

この仮説では、誕生したウイルスはヘルペスなど他の神経向性ウイルスと同様のプロセスに従って、肺胞上皮細胞から迷走神経に戻り、そこに付着し、そこで再統合することができます。その迷走神経で遺伝子物質を放出することで、抑制分子の増加の需要に応えられるだけのRNAの量を用意できるようになるわけです。

さらに、上記の二つの免疫破壊イベントの原因となる電磁波は、その強さとおそらくその「パルス性 (2) もあって細胞の生化学的なプロセスにも強い影響を及ぼしています。これはウイルスの表面に非常に大きなスパイクタンパク質の形成を起因している可能性があり、そのタンパク質のおかげでより効果的で強力な肺胞細胞との結合を引き起こします。(3) その結果、このウイルスが肺胞細胞に付着している間は重要な、「本来通りならば迷走神経の抗炎症作用の利益を得る」ことができなくなる時間となります。このことからさらに深刻なストレス反応が発生します。

ですが、コウモリにとってそれは必ずしも悪い状況ではありません。コウモリはこれらの新しい電磁波に適応する方法を見つけるまでの間は、迷走神経を再活性化することで高ストレスを緩和する必要があり、おそらく砂糖を消費することで成功させていると思われます。コウモリは砂糖を渴望している状態にあり、そのため、果物を食します。果肉を口に含み、その甘い果汁を吸い、残った果肉を吐き出します。このようにしてコウモリはストレス状態を解決するだけでなく、同時に食事を済ませます。このような状況下では、コウモリの食事は好きな果物の魅力に応えるという種のものではなく、不安に強いられた衝動で行っているものといえます(4)。

いずれにしても、コウモリが吐き出した果肉を他の陸上動物が食する可能性は高く、その動物は同時にコウモリの唾液の中に含まれているウイルスをも摂取することになります。さらに、人間がこの動物の肉を食したり、その動物を触ったりすることで、人間が次にウイルスに感染します。このウイルスがコウモリから直接人間に伝染するかどうかは定かではありません。感染経路の中間でホストを務める動物を介することでその体内でウイルスはさらに迅速な感染力を持つよう変異するようです。(5) 確かなのは、コウモリの体内よりも人間の体内の状況のほうが、制御がむづかしいという事です。

(2) Balmori A. (2009). Electromagnetic pollution from phone masts. Effects on wildlife. Pathophysiology : the official journal of the International Society for Pathophysiology. [Retrieved from [https://www.researchgate.net/publication/24180316\\_Electromagnetic\\_pollution\\_from\\_phone\\_masts\\_Effects\\_on\\_wildlife/citation/download](https://www.researchgate.net/publication/24180316_Electromagnetic_pollution_from_phone_masts_Effects_on_wildlife/citation/download)]

そこにはこう記されています。"Modulated and pulsed radiofrequencies seem to be more effective in producing [biological] effects. Pulsed waves (in blasts), as well as certain low frequency modulations exert greater biological activity. This observation is important because cell phone radiation is pulsed microwave radiation modulated at low frequencies."

(3) Khan, M. (2020). Gauss' Divergence Theorem Explains the Spike (S) Protein Characteristics and Possible Germination of SARS-CoV and SARS-CoV-2 Viruses. [Retrieved from [https://www.researchgate.net/publication/340128696\\_Gauss'\\_Divergence\\_Theorem\\_Explains\\_the\\_Spike\\_S\\_Protein\\_Characteristics\\_and\\_Possible\\_Germination\\_of\\_SARS-CoV\\_and\\_SARS-CoV-2\\_Viruses](https://www.researchgate.net/publication/340128696_Gauss'_Divergence_Theorem_Explains_the_Spike_S_Protein_Characteristics_and_Possible_Germination_of_SARS-CoV_and_SARS-CoV-2_Viruses)]

フリーランス研究者のKhan M.はこう書いています "... When sufficient radiation from a very high-intensity, narrow beam is absorbed by a nature-assisted coronavirus, we believe it could develop many long spikes with broad petals as seen in SARS-CoV-2 virus configuration."

(4) これが、コウモリが文学や芸術において一般的に恐ろしく苦しんでいる存在として描かれている理由なのかもしれません。

(5) Brugère-Picoux, J (2020). Covid-19 : Origine de la zoonose et modes de contamination. [Retrieved from: <http://www.fondation-droit-animal.org/105-covid-19-origine-animale-et-modes-de-contamination>]

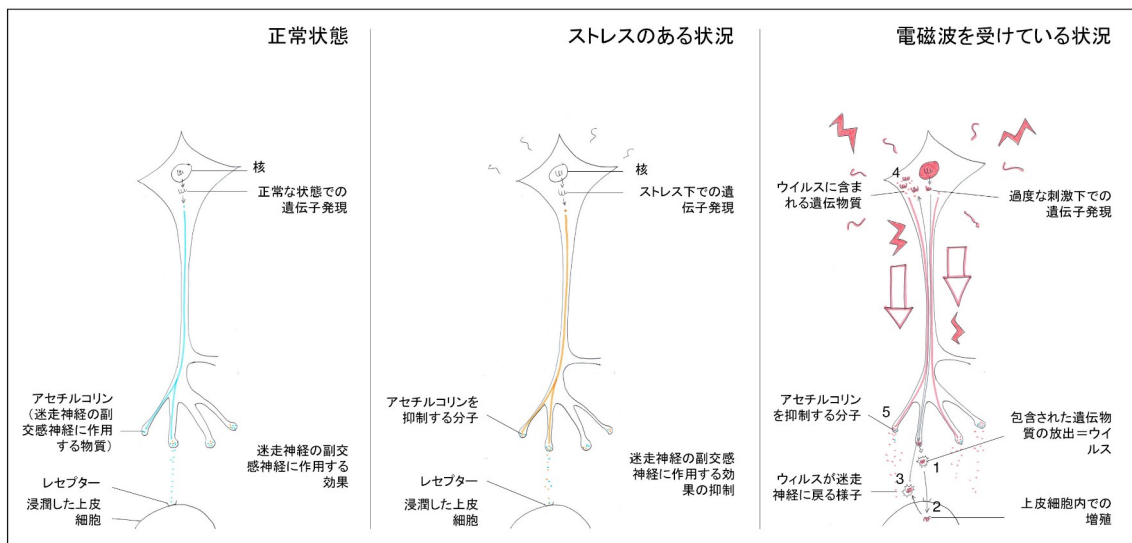


図1. コウモリの迷走神経

## コウモリから人間へ

一度感染してしまうと、人間はウイルスによって引き起こされる激しい炎症を克服しなければなりません。年齢や免疫不全などの理由でそれができない患者の場合、炎症は浮腫状態が特徴の肺炎につながります。

これらの症状を持ち合わせ、最初に申し上げました「脈が急速上奏する状態」の患者を診て、私はこの感染病が極めて危険なものであるのは二重の課題を抱えているからだ結論

付けました。一つはウイルスによって引き起こされる炎症、もう一つは迷走神経の抗炎症作用の低下です。ウイルスはアセチルコリンが迷走神経の抗炎症作用を引き起こせる部位を占めてしまうという事だけでなく、実はもう一つ、炎症を劇的に悪化させる要因が存在するのです。それは患者が身を置いている環境の中で身体に人工の電磁波を浴びさせているという事であり、そのことによってコウモリの場合と同様に抗炎症能力を引き下げているという事です。

具体的に申しますと、ウイルス感染の急性期を克服するのにかかる時間が長い場合、患者の体内で肺胞組織においてウイルスが複製しているという事です。その結果、ウイルスは迷走神経に戻り、そこで遺伝子を放出することが可能になります。電磁波は遺伝子を刺激し、その生化学的なメカニズムをも刺激します。電磁波に対する遺伝子の感受性次第では、患者は自ら抗炎症作用を抑制する分子を生成し、ウイルスと並行して、シナプスにおけるアセチルコリンの作用を邪魔することに貢献するのです。これにより、炎症が劇的に悪化します。

患者が電磁波などの特定した放射線の影響を受けやすいか否やかが感染の悪化における重要な要素といえます。電磁波の感受性は体質だけでなく、患者の神経系にもよります。さらに患者が音波や電磁波などの放射線に意図的な対応次第でもあるといえます。例えば、私たちの環境における音の関係について考えてみましょう。音は音波であり、人間は様々な音波を分類して、特定の選択されたものに注意を集中させることができます。例としてお気に入りの音楽をきくことができます。そしてその音に影響されて、リズムに合わせて動いたり、時にはダンスしたりすることもあります。ですからこの時点で、音波のような放射線はまさしく人間の体に影響を与えているのだと想定することができるわけです。

患者が置かれている環境では、いくつもの異なる周波数の放射線が遺伝子を刺激して、抗炎症を阻害する分子の生成を促す能力を持つ事があり得ます。武漢のコウモリは5Gの電磁波にさらされて、その周波数がウイルスの遺伝子に直接作用したのですが、コウモリは5Gの周波数だけでなくもっと広い幅の周波数に適応した可能性があるかと理解することが重要です。武漢のコウモリは実験室で精密にコントロールされた実験動物ではないわけですから。コウモリの電波に対する幅のあるリアクションがあった事こそ、5Gネットワークがまだ完全に展開されていないフランスを含む多くの国で流行が急速に広がっていった理由の一つでしょう。

患者は最初、自然に自分の身体を刺激する放射線に引き付けられるものです。特にウイルスによって運ばれる遺伝子を刺激する放射線に敏感です。この相互作用が起きる時点で、その放射線との共鳴は、他の要因によってさらに高められる可能性もあります。私が診て来た患者の中には例えば脈質が、体内の組織に重金属が非常に割合の高い存在を示すケースがありました。その重金属は環境汚染、歯科治療、注射、他の合成薬品の服用などに由来し、その高い伝導性が細胞における共鳴を増幅させている可能性があります。

同様に地理的な場所ごとの地質も考慮する必要があります。つまり、武漢やイタリア北部のような場所で、地中から放出される放射線が細胞内の共鳴を増幅させる原因となりえるのです。

患者の中には、脈が呼吸器系の機能の低下や、患者が低温の環境に置かれたことによる病気への抵抗性の低下などの特徴を持っているように思えるものがあります。低温とは寒い季節や、屠殺場などのように特別に気温を下けている職場などの環境をさします。最後に、高周波を放射する様々なデバイス（コンピューター画面、スマートフォン、Wi-Fi、コネクタされた機器など）に日常的にさらされるライフスタイルでは、人はおそらく特定の種類の放射線を多く受ける習慣になっている可能性があると思われます。

最悪の場合、ウイルス遺伝子の大多数が迷走神経に戻っていきます。これがこの感染症を特に危険なものにしている理由です。放射線の影響下で生成されたRNAが細胞内に存在すればするほど、患者はその活動を刺激する放射線に惹かれていきます。逆に患者がある放射線に惹かれていればいるほど、その放射線はそのRNAの活動を活発にしていきます。こうして悪循環が起り、制御が不可能なプロセスの加速につながります。感染症は致命的になります。

コウモリは、電磁波によって生じるストレスに直面する時、アセチルコリンのバランスを取り返すために砂糖を消費するわけです。しかし人間は同じ行動をするわけにはいきません。同じ効果に達するために必要となる糖分はおそらく法外な量で、そこから生じる糖尿病や肥満は副交感神経活動を低下させているプロセスを加速させることとなるでしょう。(6)

逆に、患者が電磁波を受けないように妨げると身体に影響を与えません。このように意図的に電磁波から身を離していれば感染の重症度が軽減されます。

また、アセチルコリン生成を抑制するのにかかわる遺伝子が活発である間は、迷走神経の抗炎症機能が低下していることが原因で消化器や心臓血管などに他の症状が現れるのは避けようがありません。

(6) 世界各地における肥満の問題と神経系への影響についてはたくさん研究され発表されています。例えば：

Claudino Rossi R. (2015). Impact of obesity on autonomic modulation, heart rate and blood pressure in obese young people. *Autonomic Neuroscience: Basic and Clinical* 193(2015): 138-141.

Phillipe D. O' Brien, Lucy M. Hinder, Brian C. Callaghan, Eva L. Feldman, *Lancet Neurol.* (2017). Neurological Consequences of Obesity. 16(6): 465-477.

注：上記の仮説に基づくと、ウイルス遺伝子はその複製後、または迷走神経への再統合後、その活動の部位が核質である場合、言うまでもなく、そこで潜伏する確率が高いです。よってウイルスの影響は慢性的に持続すると考えられます。

## 結論

今日、ますます多くの人々が「ウイルスは有毒で邪悪な敵である」という考えに抵抗しています。ウイルスの破壊こそが人類に持たされた困難への解決策であるという事を受け入れられない人々があります。私がここまで申し上げた新型肺炎コロナウイルス SARS-CoV-2に関する考察のモデルを提案したのは、コロナウイルスの理解と分析を手助けしたいからです。それも、あえて今主流となっている専門用語を介して行いました。こうすることで、ホリスティックな視点でこの問題を検討してもらいたいからです。そしてそれは、まず「感じる」ことからでしか展開できないものです。

私の信念は、例えウイルスによる感染のサイクルを妨げる分子・薬品が登場したとしても、そもそもウイルスの出現を引き起こす基本的な問題とその病気の悪化につながる要因が適切に検討されない限り、すなわち自然環境や生物への影響がまだ解明されていないツールや物質を使って自然環境を侵害する限り、確実にコロナウイルスのと同様な健康危機が今後、繰り返し出現するという事です。